

yamabuki i 通信

yamabuki は、『小学校でのパソコン授業』の URL より
パソコン室から 不定期 発行

No. 6 5
平成 19 年 10 月 18 日
情報教育アドバイザー
広田 さち子

「教えてあげる」「やってあげる」

みんなが同じ量の作業を持っているとき、速い人と遅い人がいれば、速い人が遅い人の分を手伝ってあげれば全体の作業が早く済みます。このとき、速い人が遅い人の分まで「やってあげる」わけです。これは、助け合いの精神で、いいことですね。

また、同じ説明を聞いて、わかる人とわからない人がいれば、わかった人がわからなかった人に「教えてあげれば」、わかった人にもわからなかった人にも、勉強になります。

普通は、このどちらも、いいことなのですが、パソコンのスキルを覚えるときには、「やってあげる」のはいいことにはなりません。

「教えてあげる」のも、単に、「ここをクリックして、次はこれをドラッグして」という<操作>を教えるのではなく、「これはこうだから、ここをクリックします、すると、ここがこう直って…」というふうに、操作の意味がわかるように教えてあげなくてははいけません。

「やってあげる」のは、もっといけない。なぜなら、困っていることが、なぜ解決したのか、本人にわからなくなってしまうからです。従って、次に同じことが起こっても、自分で解決することができず、また誰かの手を借りなくてはなりません。

たとえば、「はい・いいえ・キャンセル」で、いつも「いいえ」だからといって、保存する必要があるのに「いいえ」を選んでしまうことがあります。これは、「いいえ」の意味がわかっていないため、なぜ「いいえ」なのかの説明が徹底されていなかったせいです。理由(意味)がわからないと、トラブルの原因になりかねません。

子どもたちが友達に「やってあげる」ことがあります。これは気をつけたいです。遅い場合は、やることがわかっていないか、やることはわかっているけれどやり方がわかっていないため、周りが手を出してしまうと、授業で習うことそのものが身につかなくなります。手を出されて機嫌を損ねたりもします。授業時間で説明がわかりきれない場合もあるでしょうけれど、できるだけ自分の力で「わかってから」操作できるように、じっくり説明する余裕を持ちたいと思っています。